Ⅰ　国語科　研究テーマ

自覚的に言葉の力を働かせ、言葉とよりよく向き合う子どもを育む学び

Ⅱ　研究の重点

よりよい言葉の解釈や表現を生み出すために、協働で見いだした学びのものさしを更新して吟味する場の設定

Ⅲ　２年次の成果と課題

１　成果

(1)　国語科の学びが自己理解・他者理解にもつながっていく単元づくり

子どもの実態を踏まえ、国語科の学習を通してどのような多様性理解を生み出す可能性があるかを考えて単元づくりをすることで、生活に生きる教科の学びが可能となる。

３年生の実践では、クラス替えをして新たな人間関係を築いている子どもたちの様子を見て、相手の性格や言動の要因を多面的に捉えられるようになってほしいという願いから単元を立ち上げた。

自分が共感する登場人物を選び、読み取った性格を友達に紹介するためには、その人物のことをよく知る必要がある。子どもたちは、登場人物の言動から、表面的に読み取ることのできる性格だけでなく、言動の背景や物語内での人物の変容に着目して、複数の叙述を根拠に登場人物の性格を深く捉えていった。また、個々に読む活動を行っている最中でも、必要に応じて子ども同士が関わることができるように、学習の進み具合を見取りながらグループ内外で情報交換するよう助言した。同じ人物の性格の捉え方の差異に気付いたり、一つの言動の意味を文脈と関連付けて理解の幅を広げたりしていく活動は、日常の友達との関わりの中でも、その言動を多面的に捉える姿に結び付き、互いに関わり合いながら自他の存在について理解を深めていく力を育てることにつながると考えられる。

(2)　言葉の解釈の仕方や使い方を自分の言葉で獲得していくミニ・レッスンの設定

１年次の研究では、協働の学びで見いだした読み方・書き方・話し方・聞き方とその効果を確かめた上で取捨選択する力を高めることが課題として明らかになった。

自分の学びを見つめるときも、友達にアドバイスするときも、拠り所となる「学びのものさし」が必要となる。その「学びのものさし」を子ども自身が発見し、すぐに使ってみるという学習過程が、「学びのものさし」を活用する力を高めることと言葉の深い理解に有効だと分かったことが成果である。

３年「いろいろ見つけたよ　お話の中のわたし」では、登場人物の性格を様々な側面から多面的に捉えることができるように、文章中に明示されている性格や、登場人物の言動に暗示されている性格、登場人物の性格の多面性を読み取るという、３段階に分けたミニ・レッスンを通して、読みの方略を身に付ける活動を授業の始めに設定した。ミニ・レッスンを重ねるたびに「今日の性格を読み取る技は何だろう。」と主体的に学習に向かう姿が増えた。また、技に自分で名前を付けることが「学びのものさし」として積み重なっていくことにつながった。毎回異なる共通教材でミニ・レッスンを行い、その時間に自分が選んだ教材を読むという学習の進め方は、自分一人で読み方の技を使う試しの場となると同時に、物語を注意深く何度も読み直すことで新たな読みに気付く楽しさを味わう機会となった。そして、対象を変えて「学びのものさし」使ってみる活動は、確かな学びを支えることにつながった。

２　課題　言葉の使い方や解釈の幅を広げたり吟味したりする活動の工夫

子ども自身が、「友達の考えも聞いてみたい。」「同じ疑問をもっている友達はいないかな。」と自ら周囲に働きかけたくなるような活動の工夫が課題である。協働の学びが自分自身の学びに刺激を与え、より深い思考を引き出してくれるという実感が、自律的に学ぶために必要である。友達の言葉に関する「問い」を自分事と捉え、協働で解決していく楽しさを味わったり、自分の言葉の使い方や解釈がよりよくなったという実感を得たりできる授業づくりを考えたい。